

ドクターの肖像

212

井上晴洋

昭和大学江東豊洲病院 消化器センター
センター長・教授内科と外科の垣根を壊し統合
食道治療の100年の歴史に名を刻む
グローバル・フロントランナーアカラシア治療を一変させた
画期的手術POEMの創始者「まぎれもなく食道アカラシアです。今なら
内視鏡手術で治ります」2009年10月、昭和大学横浜市北部病院
消化器センター（当時の勤務先）で、名古屋
から上京した中学校の校長の玉置崇さんに井
上晴洋氏は言った。検診で「アカラシアの疑
いあり」と言われていた玉置さんに自覚症状
が出たのは、この数ヶ月前であった。寝ている間に口中に唾液がたまり、胸の上
がべちゃべちゃになる。寝間着を着替えるこ
とが頻繁になった。不眠と胸痛を訴える夫を
心配した玉置さんの妻が探し当てたのが、
2009年6月の米国消化器内視鏡学会での
井上氏の発表であった。根治が難しいバル
ン拡張術でもなく、腹部に傷が残る腹腔鏡下
手術でもない。全例が完治した内視鏡手術と
して発表されたが、発表時点では4症例だけ
だった。玉置さんの診察時でも10症例ほど
だったが、井上氏は理路整然と手術がもたら
す「患者の利益」について説明した。
「アカラシア治療を一変させた画期的手術で
す」玉置さんは、井上氏のその言葉に賭けた。
玉置さんはブログ「食道アカラシア入院日記」
を書き始めた。入院日は11月30日であった。



入院1日目 固形物のない食事にびっくり。改めて自分が患者だと知る。「手術で体の感覚が変わると思いますよ」主治医（編集部注：主治医は井上氏）の言葉に勇気づけられた。入院2日目 病室から横浜の夜景を見る。段取りをしてくれた家内に感謝した。

（ブログは原文のまま掲載、以下同）

入院3日目は手術日である。検温後、手術着に着替えた玉置さんは点滴針で鎮痛剤を打たれ、車椅子で手術室へ入った。8時45分に記憶は途絶えた。仰向けになった玉置さんの口から、POEM (Per-Oral Endoscopic Mucosal Myotomy) と名付けた革新的な経口内視鏡的筋層切開術が施行された。

世界初の手術は経口から内視鏡で体表に傷口なし

アカラシアは下部食道の壁が弛緩不全を起こし、狭窄して食べ物が喉を通らず、嘔吐や胸痛を繰り返す10万人に1人の原因不明の疾患。薬物療法、バルーン拡張術で治らない場合に、外科手術として食道下部から筋層を切開し逆流を防止する噴門形成術を組み合わせた Heller-Dor 法が適用されてきた。しかし長

い筋層切開が難しい上、腹部に5ヶ所以上の傷が残る。井上氏の発案は経口から内視鏡を挿入、内側の筋層である輪状筋を切開していくものだ。もちろん体表に傷口は存在しない。「360度どの角度からも切開が可能で、切開の方向も長さも任意に行えますから、極めて低侵襲に中部から下部まで広範囲の食道運動異常を解消できます」

患者の口から挿入された内視鏡が、食道の中部に粘膜下局注で膨隆をつくる。三角ナイフで2cmの穴を作り、内視鏡が挿入される。ここから食道をぐるりと締め付けて障害のもととなっている内輪筋の筋層を電気メスで切開する。内視鏡の先端のメスが、柔軟に食道壁を胃に向かって切り降りて、狭窄された部分を広げていく。胃側2cmの深さまで切開を終えると、入口をクリップで閉鎖して終了する。シンプルだが高い技術を要する。

「アカラシアを内視鏡で治療する動物での試みはありましたが、ヒトのハードルは高く、誰も臨床で行おうとしませんでした。臨床応用の方法を作り上げ実際に人間に執刀したのは世界で私が初めてです」

玉置さんが病室で目を覚ましたのは11時半。CT検査は問題なく、鈍い胸痛があるのみだ。うつらうつらと術後の夜を過ごした。

入院4日目（手術の翌日） 造影剤はすこぶるまずい！しかし「漏れていない」という検査結果が出てよかった。お昼に重湯を食べる。明日から形のあるものが食べられると言われた。うれしい。

入院5日目 朝食は8割、昼食は完食した。

「一番ひどい時を10としたら今はいくつですか？」と聞かれたので「ゼロです」と答えた。今までの私の「食べる」は「溜めては流す」だった。

入院8日目 晴れて退院。家内と2人で横浜中華街に寄った。刺激の少ない料理を頼んだ。食べ物が入っていく感覚が違う。これが食べるということなのか。

「玉置さんは完食したそうですよ」

この上なく嬉しそうに井上氏は言った。

スタート時4件の執刀数 今や世界で5000件に

玉置さんのブログは全国のアカラシア患者に瞬く間に広まり、患者が横浜にやって来た。懐疑的だった学会をよそに、合併症もなく経過も良いため、高度先進医療適用（2012年）、保険適用（2016年）を得て、昭和大学だけで1500例、世界では5000例を超える執刀数（2017年7月現在）となった。低侵襲性と高い効果が認められ、受診する患者の数が全国的に増えている。各地に執刀医が増える今後は加速度的に数万になるかもしれない。

成長意欲を持続する達人の自負 「私は35年目の研修医」

「今も気持ちちは35年目の研修医です」

こう言い切る姿勢の陰には、鋭い眼光で低侵襲の流れを先取りしてきた手技の存在があ